

# 演 題：内裏(天皇の住まい)と廷臣(公家)達の住まいの変遷

発表者：高橋正一 2024/09/07 横浜歴史研究会 例会

## (1)平安京の概容

平安京は、桓武天皇により、長岡京に代わる都として山背(山城)国愛宕(おたぎ)郡・葛野(かどの)郡に793年(延暦12年)から建設され、翌794年(延暦13年)に遷都。以後、福原遷都の期間を除いて、1869年(明治2年)まで日本の首都であった。

都城の概容は、東西4.5km、南北5.2km。東西南北に走る大路・小路によって40丈(約120メートル)四方の「町」に分けられていた(総計1216町、1丈=3.05m)。

町と町の間道の幅は小路でも4丈(約12メートル)、大路では8丈(約24メートル)以上あり、都の中心を南北に走る朱雀大路に至っては28丈(約84メートル)もあった。

政治の中心となる大内裏、その中にある内裏(天皇の住まい)は、朱雀大路の北、都の北辺に設けられ、朱雀大路によって分けられた京城の東西をそれぞれ左京・右京と呼んだ(図④参照)。

## (2)平安京の巨大復元模型

京都市中京区にある京都市平安京創生館(入館無料)には、平成6年(1994年)、平安建都1200年記念事業の一環として製作された、縮尺千分の一の平安京復元模型、及び同尺の鳥羽離宮復元模型が置かれている。

特に、平安京復元模型は、平安京を中心として東西10km、南北11km(110平方km)を復元していて、縮尺千分の一ということは10m×11mにもなり、10mを1cmで表せるので、庶民の住宅一軒一軒までを作り込むことが可能である。作られた当時は、郊外をも入れた一都市の模型(ジオラマ)としては世界最大の規模であった。

平安京の概容を(1)のように文字で表しても、また二次元の地図で見てもイメージしづらいが、この復元模型を一見しただけで、あたかも飛行機上から実際の都市を俯瞰するように理解できる。

因みに、この模型は今年のNHK大河ドラマ「光る君へ」のオープニング映像にも使用されており、大いに一見の価値があると思う。

## (3)平安京(巨大)オーバーレイマップ

平安京創生館では平安京復元模型のほか、現在の地図上に過去の詳細な史跡・旧跡を配置した巨大な地図「平安京跡イメージマップ」も展示していて、これは「平安京オーバーレイマップ」としてインターネット上に公開されている。平安京復元模型は、平安京創生館に行かなければ見ることはできないが、平安京オーバーレイマップは日本全国どこからでも見ることができる。

### ●平安京オーバーレイマップ↓

<https://heiankyoexcavationdb-rstgis.hub.arcgis.com/maps/39b5f3053a9f48b7a23301e51f6afaa1/explore>

※以下、今年のNHK大河ドラマ「光る君へ」に登場する人物には下線を引いている。



#### (4)平安時代の内裏と廷臣達の住まい

平安時代、天皇に仕える廷臣達の邸宅は、概ね大内裏の東側か南側に広く点在していた。これは平安京の特に西南部は土地が低く湿地・洪水が多く、居住に適さなかったからである。

主な邸宅には下記があり、平安京オーバーレイマップや図①と、照らし合わせて見てみたい。

- ① 堀河院 藤原基経(836～891)邸を堀河院(堀川殿)といい、関白藤原兼通(925～977)が改修し居住した(初めての里内裏となった)。
- ② 閑院 藤原冬嗣(775～826)が建て、後に藤原基経邸、藤原兼通邸、藤原公季邸となった。
- ③ 東三条殿 藤原良房(804-872)から藤原忠平(880-949)、藤原兼家(929-990)が伝領した。その後、藤原道隆(953-995)、藤原道長(966-1028)、藤原頼通(992-1074)と歴代の摂政・関白達が伝領していったので、藤原摂関家の象徴的邸宅として重視され、また、寝殿造の代表例とされている。  
ここで兼家の長女・超子は三条天皇を、次女の詮子は一条天皇を産んでいる。  
三条天皇はここから内裏に入っている。詮子の里内裏としても使用され、皇太后となった詮子は「東三条院」と呼ばれた。道隆の長女・定子はここから一条天皇に入内している。道長の娘で三条天皇の中宮となった妍子の御所、彰子が産んだ後朱雀天皇の里内裏としても使用された。
- ④ 高松殿 醍醐天皇の皇子「源高明(914-982)」の邸宅で、高明の娘明子(道長庶妻)に伝領された。保元の乱(1156)の際には、後白河天皇の本拠地となり、平清盛・源義朝はここから白河(崇徳上皇方)へ出撃した。
- ⑤ 二条宮 中宮定子の邸宅。長徳の変で当時懐妊中の定子は、内裏を退出し二条宮に移った。ここに兄・伊周と弟・隆家をかかまう。北側に伊周の二条第があったという。
- ⑥ 町尻殿 藤原道長の次兄通兼の邸宅。通兼は町尻殿とも呼ばれていた。
- ⑦ 小野宮 もと文徳天皇皇子の惟喬(これたか)親王の邸があり、彼が小野親王と呼ばれたところから小野宮の名がついた。その後、太政大臣藤原実頼(900-970)の邸宅となる。このため実頼の系統を小野宮家と称し、伝領したのは養子(実は孫)の藤原実資。
- ⑧ 四条宮 関白藤原頼忠(924-989)、嫡男公任の邸宅。また、ここで育った円融天皇中宮遵子は別名「四条宮」と称した。
- ⑨ 一条院 もとは、藤原道長の祖父師輔(909-960)の屋敷で、子の伊尹、為光に受け継がれたが、佐伯公行が為光の娘・柅子の妹から取得し、藤原詮子に献上、詮子は御所として修造し、一条天皇が崩御の時まで里内裏として使用した。長徳の変の舞台。
- ⑩ 桃園第 藤原行成の本宅。元々は外祖父「源保光」の邸宅。他に三条宅、中御門宅。
- ⑪ 高陽院 当初は桓武天皇の皇子・賀陽親王の邸宅。保安元年(1021年)摂政関白・藤原頼通は、この地を大いに気に入り、敷地を倍に広げて4町に及び、豪壮な寝殿造の建物を造営した。4町を使用する屋敷地は、臣下としては最大規模。頼通引退後、里内裏として提供、後冷泉天皇以後5代の天皇がここに居住した。
- ⑫ 河原院 嵯峨天皇の皇子・源融(822-895)の邸宅。4町の広大な敷地(一説には8町)で、臣下の屋敷地としては平安京最大を誇った。『源氏物語』の光源氏の邸宅「六条院」のモデルの一つが河原院との説もある。また夕顔と一夜を明かした某院も河原院がモデルだという。
- ⑬ 土御門殿 源雅信(920-993)によって建設。雅信の娘倫子と藤原道長が結婚した際、道長はここに東三条殿から移り住む。詮子は、東三条院となった後、主にここを御所とした。また中宮・彰子は、ここで敦成親王(後の後一条天皇)と敦良親王(後の後朱雀天皇)を出産した。彰子の妹嬉子もここで後冷泉天皇を出産。後一条、後朱雀、後冷泉ら三代の天皇の里内裏ともなり、道長家の栄華を象徴する邸宅となった。

## (5)里内裏

平安遷都以来、170年ものあいだ火災に合うことのなかった内裏が、天徳4年(960)の焼亡以降、100年たらずの間に実に10回以上も焼亡を繰り返したのだった。

その背景には「公事の夜儀化」、左京北半分への人家密集など火種が多くなったことが挙げられる。これは平安京という都市の変容・成熟の結果でもある。

960年の最初の内裏の焼亡の時、当代の村上天皇は後院(ごいん、譲位後の御所)の冷泉院に移ったが、次の貞元5年(976)の内裏焼亡では、円融天皇が藤原兼通の堀河院を仮の皇居とした。これを里内裏と称し、里内裏の始まりとなった。

11世紀前半までの摂関期には、焼失した平安宮内裏はその都度再建され、平安宮内裏が健在である時、里内裏を皇居とする例はほとんど無かったが、11世紀後半以後の院政期以降になると、次第に内裏再建に歳月を要するようになり、内裏の有無に関わらず里内裏を皇居とする例が常態化した。

9世紀から12世紀までの平安宮内裏の使用期間は、9世紀=99年、10世紀=93年、11世紀=33年、12世紀=12年と、年代を経るごとに少なくなっている。

結局、平安宮内裏は、14回もの焼失・再建を繰り返した後、嘉禄3年(1227)4月、再建途中に焼けたのを最後として再建されなくなった(廃絶)。

### ① 一条天皇と内裏焼失と一条院

999年(長保元年)の内裏焼失後、一条院に遷御した一条天皇は、1000年(長保2年)に内裏が再建されると、10月11日に還御。

しかし、1001年(長保3年)11月18日、再び内裏が焼失。11月22日、再び一条院に遷御した。

1003年(長保5年)、内裏が再建されると、10月8日に還御するが、1005年(寛弘2年)11月15日、またも内裏が焼失。

この時は、いったん東三条殿に遷った後、1006年(寛弘3年)3月4日、一条院に遷御。同年には内裏が再建されるが、還御しなかったのだという(一時還御しているという説もある)。

1009年(寛弘6年)10月5日、今度は一条院が焼失。すぐに一条院の再建が始まり、1010年(寛弘7年)11月28日、枇杷殿から再建された一条院に遷御している。

一条天皇は、1011年(寛弘8年)6月22日、一条院の中殿(清涼殿)で崩御。一条院では、南殿を紫宸殿、中殿を清涼殿と呼んでいた。

### ② 紫式部も一条院に出仕

内裏が何度も焼失したため、一条天皇の中宮・藤原彰子に仕えていた紫式部も一条院に出仕していた。

ただ、紫式部が中宮・藤原彰子に仕えた時期については、1005年(寛弘2年)とする説と、翌寛弘3年とする説などがある。したがって、初出仕の場所は、寛弘2年ならば東三条殿、寛弘3年ならば一条院ということになる。(以上①②は「[yoritomo-japan.com](http://yoritomo-japan.com)」より抜粋)

## (6)鎌倉・室町時代の内裏と廷臣達の住まい

平安宮内裏廃絶の後、13世紀の天皇方(82代:後鳥羽天皇~94代:後二条天皇)は、閑院、二条殿、大炊御門殿、冷泉万里小路殿、押小路殿などを里内裏とした。

その後、鎌倉時代末期から建武の新政期まで(花園・後醍醐・光厳・後醍醐)の皇居は、本格的な内裏の構造を持つ冷泉富小路殿であったが、1336年(建武3年)の兵火によって焼失した。

翌年 1337 年 9 月 26 日(建武 4 年 9 月 2 日)、北朝 2 代光明天皇が現在の京都御所の地にあった土御門東洞院殿に居住して以降、明治 2 年(1869 年)、明治天皇の東京行幸時まで、ここが皇居となった。

当初は東西一町南北半町の敷地だったが、足利義満によって敷地が拡大され、その後織田信長や豊臣秀吉による整備を経て現在の様相がほぼ固まった。

しかし、何度も火災に見舞われ、8回再建されている。

廷臣達の住まいは、平安時代末になると、彼らの経済的能力が衰退するに及んで、正規の寝殿造の大邸宅が建てられることは少なくなった。

13 世紀に発生した「書院造」は、寝殿造が変化したものであり、寝殿造の規模が縮小し、調度類が固定していくことで定式化・狭小化していったと考えられる。

寝殿造は室町時代でも將軍邸の室町殿などに、その片鱗が見られるが、最終的に、平安京内がほぼ灰燼と化した応仁の乱で終焉を迎えた。



